

5Sは楽しい生活の普遍の原理

少々難しい見出しにした。ベストピアでは10年間隔で5Sを語っているが、80歳を過ぎても身近に感じる座右の銘である。人よく仕事をなさんとすれば難しい経営理論や他人の成功物語を聞くより5Sを徹底することが賢明である。記憶力の低下、物忘れの多発と戦う毎日から自戒を込めて再度5Sを語る。尚、写真は本文と関係ありません。末尾参照。

1、5Sとは整理、整頓、清掃、清潔、躰（習慣）のことである。

(1)整理とは、

乱れた状態を片付けること。秩序を整えること。

必要な物と不必要な物を分別し不要な物を捨てること。

企業においては定期的に行う棚卸業務は整理から始まる。期末または月末に倉庫にある商品の一つずつ観察点検して優先順位をつける。優先順位は企業の価値観でルール化されている。定められたルールに従って優先順位をつけ最下位の順位の物は処分する。捨てる。整理は高度な判断が求められるから新入社員には出来ない仕事である。

家庭共同体においても、又、私的な部屋においても不要な物が溜まるというのが一般的である。（その理由については割愛する）

机の周りが散乱したりすると、イライラして片付けたくなるのが普通の人々の心理状態である。整理をすることは「片をつける」ことである。しかし、整理がされない状態が続いても平気な人が増えている。「片をつけること」簡単なことではない。思い切れない、執着が強いのである。

整理を怠るとどうなるか。テレビの報道を通じてその惨憺たる光景を見るが、案外他人事として見られている場合が多い。我が身を振り返ると片付けられない人が多いのである。

我が家では整理は模範的である。不必要な物は殆どないのが自慢である。だから空間が広く感じられ、訪れてくださる方は「広いですね」と褒めてくださる。捨てることが上手なのである。



話はそれるが、「片付ける」ということについて

夏目漱石が名著「道草」の最後に名言を記している。漱石の先見性の一つである。

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」この名言は人間関係についての話であるが前後はドラマの名場面である。一読をお薦めする。（新潮文庫・p333）

最近では各人のパソコンの中の整理が注目されている。捨てるかどうか迷う情報は仮ファイルを作る。次の整頓と同時に行われることが多いので、詳細は(2)で述べる。

(2)整頓とは、

決められた場所に置く（決められた場所に時間までに戻す）

言葉では簡単明瞭であるが、これが難しい。

多くの企業で一番頭を痛めている作業である。なぜなら整頓には「例外なし」の100%が要求されるからである。「整頓には例外なし」この原則こそ5Sの成功要因である。

工具等には共通に使用する物が少なくない。あるべき場所にあるはずの工具がない。はずが外れる。作業手順のリズムが狂う。気分が悪くなる。怒りの感情が出る。作業効率は著しく落ちる。手順が狂うだけの問題ではない。感情が乱れる、職場環境に信頼がなくなる。責任の転嫁が起こる。言い訳が多発する。感情の乱れは螺旋状的に不信を生む。企業文化が悪くなる。これは恐ろしいことだと思う。

家庭の場合も同じである。夫婦間の亀裂が生じる原因の多くは整頓にある。自分が選んだ相手が「こんなにだらしが無いとは思わなかった」と相手を責めながら自分も憂鬱になる。整頓能力は幼児の時の躰によって養われる故に、そう簡単に修正は出来ない。未整頓が繰り返される。ここに双方の嫌気が芽生えてくる。

個人の場合も同じである。特に私は整理能力に劣っているのでよくわかる。後始末が下手である。机の上を散らかしたまま放置する。机の上に物がおけなくなると、手当たり次第に引き出しに入れ込む。ロッカーに積み上げる。そこで何が起こるか。探し物に時間を浪費する。探している間に、自己嫌悪に陥る。仕事が中断するだけではない。感情が乱れる。時間の浪費は自分の残された宝物を捨てるようなものである。よけいに悔しさが噴出する。

パソコンの場合は予めファイルを作っておく。どのようなファイルを作るかには個人の方針による。ファイルをするということは捨てないことである。

捨てるか否か迷った場合は「とりあえず」仮ファイルに入れる。



音声の入った動画です。絵の中心をクリックしてみてください

パソコン上でのファイル数は記憶力等の能力によって範囲が異なる。80歳を過ぎた私には8ファイルを管理するのが限界である。最も重要な情報は紙でバインダーに保管しているがそれも8バインダーが限界である。(今、これらをそれぞれ5ファイル、5バインダーにしようと決意した)

ファイル数を増やすと欲張って捨てるものがなくなってしまう。整理に戸惑う。これは整理と整頓がごちゃごちゃになって、再び秩序を失う状態に逆もどりする。先に「とりあえず」と言ったが、これが曲者である。「とりあえず」が長期化すると思わないところでトラブルが起きる。これはパソコンだけのことではない、日常生活の場面でも当てはまるが、「とりあえず」には期限を設けておくべきである。

若い人はファイル数が少ないようだ。賢いからだと思う。優先順位をしっかりと付けている。ファイルしないものは日付順で放置しても、若い記憶は「大体の検討がつく」ので日にちを追いかければ短時間に必要なものが見つけれられる。

幼稚園で「お片付け時間」というのがあり、次のプログラムに移行する前に、今使っている遊具を、「お片付け、お片付け」と歌に合わせて元の場所、決められた場所に戻すという動きをする。(遅い幼児がお片付けできるまで待つのが理想的であるが――)(家庭で同じように「お片付け」の躰をされると自発的にこの能力は身に付くのであるが――)

整頓とは「必要なものをいつでも誰でも取り出せるよう、秩序だてて配置すること」これができれば人生はもっと楽しくなること間違いなしと私は思う。



(3)清掃とは、

きれいに掃除をすること。もっと深く表現すると掃き清めること。

整理、整頓が出来ないでは掃除は出来ないという意味で清掃が3番目にきています。

隅から隅まで綺麗にするには、散らかっている所は掃除ができません。表面を撫でるだけ、隅を見逃して丸く掃くだけ、掃除のプロの常識は四角く。汗を流して納得のいく清掃ができた後の清々しさは誰もが体験をしていることである。

イエローハットの創業者・鍵山秀三郎氏は掃除で企業を発展された方として有名です。

「日本を美しくする会」を組織して後継が日本各地におられ、今も公衆トイレの清掃ボランティア運動を展開されている。「自分を磨く」という境地に至ると多くの方が証言されています。私も100日間修行とし某ファーストフードのトイレを開店前に清掃したことがある。良い体験であった。他人の家のトイレ掃除をする修行として採用している団体は他にも古くからある。

(4)清潔とは

(1)(2)(3)が維持された状態である。衛生状態が良いことである。

毎日磨かれた掃除をしている場所は「爽やかに輝いている」気分がいいのである。

環境が良いのである。楽しい感情が生まれるのである。やる気が出るのである。

最近では禁煙が清潔要因に加わった。受動喫煙の害を考えると当然のことである。

私は1984年に最初の職員を採用した。条件は喫煙しない者、職場ではスリッパを履くことであった。労働条件は土曜日曜祭日は休業とする月給制度であった。

堂々と広告を出したが応募者はなかった。しかし、業界にはある種の影響を与えることになった。勤務場所が悪いからと考え小田原駅前に事務所を構えると二人の応募があった。一人は喫煙者であったが、「喫煙をやめること」を条件に採用した。彼はすぐに私の右腕になった。そして彼の申し出によって「職場外での喫煙は認める」ことになった。彼の不満は消えず、一所懸命勉強して試験に合格してすぐに独立した。今、彼から「禁煙はキツかったが休みが多く残業もなく勉強ができた」と感謝されている。

清潔な場所では機器備品の使用可能年数が伸びる。早い時期からパソコンを導入したので高価であった。妻の経験で室内をスリッパにして、退社時にはパソコンに布をかぶせることが習慣となっていた。パソコンの耐用年数が2倍近くになってメーカーの担当者を困らせた。(メーカーは買ってもらえる時期が来ても買い換えてくれない)私が現役時代会計専用パソコンは平均800万円、高機種になると1500万円であった

清潔は耐用年数を長引かせることを証明して宣伝した。採用された企業では喜ばれた。

清潔の効果について自慢話を交えて事例を披露しました。

清潔を見出す敵は未整頓である。折角清潔を保とうとしても、誰かが不用意に不要のものを置くことがある。「つい、置いてしまう」ことがよくある。これを見逃してしまうと「元の木阿弥」となる。

私はこのことを何百遍も繰り返してきた。そこで、我が家に一つの「黄金律」ができた。台所兼居間兼応接室(我が家は三つが一つになっている。独立した応接間はない。来客は台所のテーブルに座って頂くことになる)の中央にあるテーブルには使用時以外は「何も置かない」と話し合っただけで決めた。置かれたものは捨てらる運命にある。整頓はこれ程厳しくないで5Sを崩してしまう。存在するものは何らかの影響を周りに与えている。空間の清潔を乱してしまうのである。

1976年、国鉄新幹線こだま号への禁煙 車両(16号車)の導入は、分煙化運動が全国的に認知される先鞭でした。1978年には国民健康づくり運動の一環として厚生省の「喫煙場所の制限について国立病院・療養所における分煙対策があり、国内線 航空機、国鉄連絡船に禁煙席が設けられるようにもなりました。1980年には、東京地裁で新幹線の半数以上に禁煙車設置を求める嫌煙権訴訟が始まり、旧国鉄は新幹線ひかり号に禁煙車両を設けました。1981年には福岡市営地下鉄のホームの禁煙化、続く名古屋市営 地下鉄の構内禁煙(1985年)、JR山手線2駅終日禁煙モデル(1987年)と防煙が普及しました。

週二日休日制度の始まり

週休二日制は、1965年に松下幸之助の号令のもと、松下電器産業(現パナソニック)が始めたそうで、大企業が導入しはじめたのはそれから15年も後の1980年頃、官公庁に導入されたのはさらに12年遅れの1992年、そして公立小中学校及び高等学校の多くでは、2002年に毎週土日が休みになりました。



(5) 躰(習慣) とは

5Sが始まった頃(1960年頃からは躰(しつけ)とされていたが、いつの頃から「習慣」と呼ぶようになった。

当時の識者や「お偉い方」が押しつけと躰の違いが分からなかったのだと善意に解釈している。

習慣とは(1)(2)(3)(4)を無意識でできるようになる継続概念である。何事も継続が大切であるが、躰を除外する必要はない。

躰はマナーである。自己の内外を美しく装うことである。

その基本は他人に迷惑をかけないことである。道徳でも倫理でもない、人間としての常識である。人の和を作り出す栄養素である。①挨拶、②ありがとう、③笑顔、④後始末、⑤車内で席を譲る等々の単純なこと。形から入って、そして自分が磨かれ内面から美しくなるのが躰であり、その基礎は「三つ子の魂百まで」と言われるように3歳までの家庭教育にある。幼い時に恵まれた教師についての子は幸せであると私は思う。

さて、習慣に話を戻そう。企業内で(1)(2)(3)(4)を無意識にできるようになると生産性は向上する。なぜなら、例外処理が減少する。気分良く仕事ができる。喜びの感情が出てくる。達成感を多く味わう。企業の品格が滲み出る。社員は自分の会社に自信と誇りを持つようになる。5Sが企業文化になっている会社には品位がある。(文化になるとは強制されないで、全員が「自ずから」という自律した自己に成長していることを意味する。)

(6) 5Sのまとめ

(1)整理、(2)整頓、(3)清掃、(4)清潔、(5)躰(習慣)の好循環は職場においては安全を実現する。従って、私は5Sの目的は「安全の実現」と言っている。「5Sなきところに安全なし、安全なきところに安心なし」。私たちにとって健康であることほど幸せなことはない。安心して働ける環境の会社での社員は意欲が高い、生産性が高い。生産性が高いことは給料が高くなる可能性が高いということである。

(7) 5Sを定着させるためには

①「例外なし」を徹底すること。厳しく厳格に徹底すること。

「うるさく、くどく、しつこく、くりかえし、あきず」に注意すること。

リーダーには根気がいる、忍耐がいる仕事である。5Sにおいてはリーダーは率先者でありかつ、インスペクター（検査員、監査員）にならなければならない。人格的なインスペクターのもとでは早く5Sが定着する。

同時に「企業においては人は評価されることを求めて働いている」従って5Sの定着には褒章制度、評価制度と連動することが効果的である。私は情意評価を導入して成功例を増やしてきた。私の長年主張してきた評価制度の原点はここにある。



②段取り精神の抑揚

5Sの定着の成功要因に「段取り・D」がある。

段取りには色々な意味づけがあるが、私は「次の工程を思いやる配慮」「次の仕事をする人のことを考えた配慮」と定義している。次の人の仕事のことを思えば整頓は当然となる。従って整頓には例外があってはならない。

段取りは「愛の種」である。5Sの根底には「愛の川が流れている」。従って職場のコミュニケーションはスムーズで気持ち良く、和が生まれ、信頼感に溢れる。人間関係も良くなる。意欲が湧く。生産性が上がる。

日本の諺に「段取り八分」があるが、良い段取りは仕事の80%を完成しているという意味である。生産性を上げるには「良い段取り」が必要なことは言うまでもない。

良い段取りをするには「次の人への配慮、思いやり心」が必要である。

③{5S+D}は企業が生産性を高めるための基本的必須行動である。

生産性を高めるためには優れた機械設備だけでは不十分である。職場に流れる感情が乱れていない、平和であることが必要である。意欲はそこから生まれてくるからである

{5S+D}は安全な職場の前提であり、安心して働け、社員が仕事に自信と誇りを持つことができる根である。5Sの根底には「段取りという愛の川が流れている」その源は言うまでもなく経営理念であり、経営陣の日頃の姿勢、態度、言動である。

又、経営陣がどれだけ周りから信頼され、且つ、守られているか、最近の事件から私は考えた。経営陣が守られているということは、社員が命懸けで経営陣を守って働いているからである。そんな会社になって欲しいと願って働かせていただいている。終

体全体で感じる絵画展

IMMERSIVE MUSEUM 日本橋

東京日本橋三井ホール

7月14日の私の体験したことを写真と動画で本文に挿入しました。



音声の入った動画です。絵の中心をクリックしてみてください。不思議な体験ができます。小原撮影

本文が味気ないので何かしたいと思っていたらこのプログラムがあると知り、その日に行ってきました。本文を読み疲れましたら、ご覧ください。
絵の中に引き込まれ、自分もその世界にいる錯覚を覚えます。今までにない体験でした。

鑑賞する絵画から体感する絵画へ。ここはあなたとアートを変える場所。視界一面に映し出された数々の名画たち。あなたは一瞬で絵画の中の世界へ入り込む。そして名画たちが幾年の時を越え動き出す。それはかつて画家たちが目にし残したかった物語が動き出すということ。モネ、ドガ、ルノワールが見た世界をあなたも体験してみませんか。

今回のイマーシブ・ミュージアムとは、モネ、ドガ、ルノアールなどの印象派の絵画の世界を、全身で浴びるように鑑賞する没入型ミュージアム。(immersive museumホームページから引用)

本展覧会は撮影は許可されています。

パリ通信第127号

ポストCOVID-19 パリ語学研修

6月末から日本入国時の水際対策が大幅に緩和された。海外から帰国する際の必要書類として「帰国便出発時刻72時間以内のPCR検査陰性証明書」があれば、日本到着後のPCR検査、数日間の空港待機、2週間の自宅隔離と言った厳しい制限が解除された。到着時の公共交通機関利用も可能になり、ほぼコロナ禍以前の状況に戻った。（日本への帰国が楽になった）

日本からの海外渡航が可能となり、日本の学生さんたちの海外研修も3年振りに再開できた。久しぶりのサポートである。

ホームステイをして、パリの語学学校で午前中フランス語の授業、午後から私がパリ市内や近郊を案内する2週間。参加した18歳から20歳の女子学生5名と7月の暑いパリを歩くことになった。

パリ研修サポートを始めて10年以上になるが、今年は予想外のハプニングが次々に起こった。

(1)パリ到着と同時に一人の学生さんが「コロナ濃密接触者」と判明。日本の家族が次々に発熱しコロナ陽性となった。ホームステイに到着と同時に部屋に籠り、潜伏期間を考慮し、三日目にPCR検査に連れて行った。症状もなく幸い陰性で三日目からは授業に参加することができた。

(2)別の生徒さんはスマホの引ったくりに遭ってしまった。7月14日「パリ祭」の出来事だ。フランスは祝日で午前中はシャンゼリゼ通りで軍事パレードが行われる。今年はウクライナ兵がパレードの先頭を歩き、軍事の現実味を帯びた式典となった。シャンゼリゼ通り周辺は人出が多いので、サクレ・クール寺院の高見で戦闘機、ヘリ、軍事旅客機など空のパレードを見た。

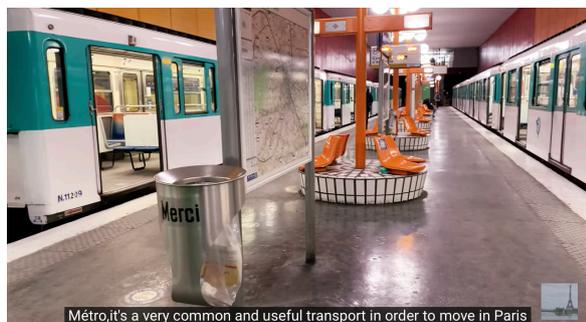
夜は21時からエッフェル塔の足元「シャン・ド・マルス」でパリ市が主催する野外クラシック・コンサートがあり、23時エッフェル塔から花火が打ち上げられる。パリの夏は23時

にならないと日が落ちない。30分間続くパリの花火は見事で、遠くから見にくる人も多い。その花火大会を見るためにエッフェル塔の真向かいトロカデロで被害にあった。

夜は女子一人で出歩かないように注意したが、パリの花火を見たかった気持ちはよく分かる。後で分かったことだが、浴衣を着て見に行ったのである。日本では見慣れた花火大会の浴衣姿も、パリでは目立つ。



観光客が戻ってきたパリはスリや泥棒も戻ってきたことを意味する。一目で日本人と分かる浴衣姿はターゲットになる。二人組の男にスマホを引ったくられた。幸いにも身体への危害がなくほっとした。翌朝警察署に同行して被害届を出し、帰国後保険会社で手続きをするよう説明した。コロナ禍で海外旅行が遠ざかり、引き籠もる生活が3年以上続いたせいだろう。海外旅行に伴うスリや引ったくりへの警戒心をもっと強く言い聞かせるべきだったと反省している。



(3)もう一人はパリのメトロのドアに頭を挟まれるというパプニング。パリのメトロに乗った経験のある人には容易に理解していただけるが、メトロの金属ドアは勢いよく閉まる。時々手や足を挟まれて痛い思いをしている乗客を見かける。幸いホームステイ先で半日休んで痛みも引き、翌日からは普通に戻った。

(4)さらにもう一人はヴェルサイユ宮殿に行った翌日アレルギー性の赤い発疹が出た。慌てて薬局に駆け込み、ヴェルサイユ宮殿の庭でダニの一種の虫に噛まれた斑点と判明。当人は蚊に刺されたと思っていたが、手、腕、脚全体に赤い斑点が広がり、アレルギーを抑える薬と塗り薬で症状が治まった。暑いので半袖、短パン姿だった。

今年の7月はパリも記録的な猛暑となり、19日には日陰で41,5度を超えた。外を歩くのは熱中症の危険があり、地球の温暖化、異常気象を肌で感じる一日だった。この日は午前中の授業だけで帰宅し、涼しいところで過ごしてもらった。パリの一般家庭にエアコンはなく、冷房に慣れた学生さんたちは予想していなかった暑さに驚いていた。

コロナ禍で一旦途切れたパリ研修。3年のブランクは思った以上に大きいことに気づいた。そして日本もフランスもコロナ第七波に突入した夏休み、コロナの影響はまだまだ続きそうだ。(古賀順子記)

编者あとがき。

古賀さんの記事は事実であるが控えめな表現で留められています。

これらの四つの事故の処理その他の考えられない責任等が隠れているようですが、若い人たちがこれらの体験を生かして成長されることをひたすら願っておられます。

このような事故はパリだけではありません。もっと悪質なものもありますが、しっかり対策をとっていくと楽しい旅ができます。個人旅行に不慣れな人はしっかり予備知識を学ぶが必要です。